

「発信力」を高める英語学習指導の在り方

－4技能相互の活用を中心として－

高久 由紀子 星野 百合子 田村 岳充

昨年3月に新学習指導要領が告示され、その中に小学校高学年での外国語活動の実施が盛り込まれるなど、英語教育の在り方については大きな変換期を迎えている。

本校外国語科（英語）では、現行の学習指導要領が告示されてからの10年にわたり、「実践的コミュニケーション能力の育成」を中心とした研究に力を注ぎ、平成17・18・19年度の3年間においては、本校共同研究の研究主題である「ともに学ぶよさを生かした学習指導の在り方」－コミュニケーションする力の育成と活用－を受けて、生徒相互の「対話」を中心とした研究を行い、数多くのコミュニケーション活動を試みた。その後も視点を変えながら、コミュニケーション能力の育成を目標とした研究を進めている。

1 研究テーマ設定の趣旨

1 本校の共同研究から

本校共同研究では、昨年度から「新しい時代に対応した授業の在り方を考える」－活用型学習活動の実践を通して－を掲げ、新たな研究を開始した。本校では、学習指導要領の改訂にあたり、これまでの授業の在り方について再考し、生徒の知識・技能を「生きてはたらく知識・技能」へと高める学習活動の在り方を検討すべきであると考え、上記のテーマを設定するに至った。そこで、外国語科（英語）においても、これまで行ってきた授業の在り方を見直し、コミュニケーション活動の内容改善を図ることを中心として、その質を高めていくことが必要であると考えた。

2 本校外国語科（英語）のこれまでの研究から

本校の外国語科（英語）では、これまでの研究において、言語の使用場面や働きを意識するとともに、生徒の自己表現を促す活動を数多く設定することで、「英語で表現できた」・「英語で表現できてよかった」というコミュニケーションの楽しさを実感させることに努めてきた。また、生徒に身に付けさせたい実践的コミュニケーション能力を、次のように定義してきた。

実践的コミュニケーション能力

- ① 「自分の考えや気持ち」を言語の使用場面と働きを意識して表現する能力
- ② 「相手の考えや意向」を受容し、対話する意味を創出できる能力
- ③ 基礎・基本を自分なりに活用し、コミュニケーションを図ろうとする態度

この定義を受け、平成17・18・19年度の3年間においては、②に焦点化し、生徒同士の相互交流を指向した研究を行った。研究の最終年度に行った生徒へのアンケート調査では、相手の発話内容を受けた上で、それに対する適切な質問をすることができるようになった、と回答する生徒が増えた。いわゆる「聞き手」の側である生徒の技能が向上したことが成果として挙げられる。※52回公開研究会外国語科（英語）各論参照

しかしながら、話し手の側である生徒の発話内容を分析すると、その場に応じた適切な文法事項を使用することができない等、十分に満足とは言えない状況が見られた。生徒が、自らの力でその場に応じた語彙や文法を選択し、自分の考えや意見を相手に分かりやすく伝えることができるような力の育成を図りたいと考えた。

そこで、今回の研究においては、これまで実践してきた聞き手の育成を続けつつ、「自分の考えや気持ちを相手にわかりやすく伝えること」の指導に焦点をあて、本校外国語科（英語）が以前から取り組んできた「話し手の技能の向上」に、研究をすすめていくこととした。

3 英語教育に関する提言から

平成19年8月に出された、中央教育審議会教育課程部会外国語専門部会「外国語科の現状と課題、改善の方向性（検討素案）」には、課題として、中学校・高等学校を通じて、基本的な語彙や文構造が十分に身につけていないことが挙げられ、また、コミュニケーションの中で自らの考えなどを相手に伝えるための「発信力」の育成が重要であることが謳われている。その改善の方向性としては、以下のように述べられている。

「聞くこと」や「読むこと」を通じて得た知識等について、自らの体験や考えなどと結びつけながら活用し、「話すこと」や「書くこと」を通じて発信することが可能となるよう、中学校・高等学校を通じて、4技能を総合的に育成する方向で改善を図る。

以上の3点から、本校外国語科（英語）では、授業中に行う学習活動において、基礎的・基本的な知識・技能（態度も含む）の確実な定着を目指した指導を基盤とし、教材や他者との関わりの中で、それらが総合的に伸張されるような活動及び指導過程についての研究を進めることが、新学習指導要領において求められる英語授業において必要なのではないかと考え上記のテーマを設定することとした。

2 研究計画

上記の趣旨をふまえ、以下のような研究計画を設定した。（年度は研究年度を示す）

(1) 第1年次（平成20年度）

- ア 本研究において求める「発信力」の定義の検討
- イ 「発信力」を高めるための手だての検討
- ウ 外国語科（英語）における活用型学習活動の考え方の検討
- エ 研究の視点に基づいた授業の実践

(2) 第2年次（平成21年度）

- ア 授業改善のための手だての修正・改善
- イ 研究の視点に基づいた授業の実践
- ウ 研究の評価方法についての検討

(3) 第3年次（平成22年度）

- ア 研究のまとめおよび評価
- イ 新学習指導要領に基づいた年間指導計画の作成
- ウ 新研究の内容の検討

3 昨年度までの研究

研究の開始年度であった昨年度は、生徒の実態把握及び本校外国語科（英語）が求める「発信力」の定義等、理論面の構築を中心として研究を行った。

1 本研究において求める「発信力」とは

中央教育審議会外国語専門部会において、発信力とは「単に受信した外国語を理解することにとどまらず、コミュニケーションの中で自らの考えなどを相手に伝える力」と定義されている。本校外国語科（英語）では、「コミュニケーションの中で」という部分に重点を置き、「英語を聞く・読むという行為から生まれる、自分の考えや気持ちを伝える力」を生徒に身に付けさせたいと考えた。また、前回の研究における成果において、コミュニケーションでは「話し手」と「聞き手」の両者を分けて考えるべきではなく、「発信」と「受信」とが相まってその質が高まるものであることがわかっているので、本研究において生徒に求めたい発信力を次のように定義した。※第53回公開研究会外国語科（英語）各論参照

「発信力」＝コミュニケーションを通して得た知識や情報をもとにして、自らの考えや意見を相手に分かりやすく伝達することができる力

2 授業実践例

昨年度の授業の実践例を紹介する。

4 技能が相互に活用された活動の例（第2学年）

- ア 単元名 PROGRAM 3 A Trip to Australia（SUNSHINE ENGLISH COURSE 2）
- イ 本時の目標
 - (7) 夏休みの予定を話題にして、進んで友人と対話することができる。
 - (1) be going to / will + 動詞の原形の疑問文やその応答文を用いて、夏休みの予定について対話をしたり、その内容を表現したりすることができる。

ウ 展開

指導過程	生徒の活動	指導上の留意点
1 ウォームアップ	1 始業時のあいさつをする。	・明るくあいさつを 交わし、英語学習の 雰囲気を作る。
2 前時の復習	2 本文の内容、基本文を確認する。	
3 Activity 1	3 “Let’s go on a school trip!” (1)活動の目的についての説明を聞く。 (2)ペアで遠足の予定について対話する。 (3)ペアで対話した内容を発表する。	
4 Activity 2	4 “What’s your plan for this summer?” (1)活動の目的についての説明を聞く。 (2)活動で用いる対話の練習をする。 (3)ペアで対話活動を行う。 (4)対話の内容を発表する。 (5)対話の内容をワークシートに書く。 (6)グループ内で発表する。 (7)友人の作品をペアで読み、質問や感想、アドバイス等を行う。 (8)アドバイスをもとに、もう一度文章を書く。 (9)出来上がった作品を発表する。	◎既習の語彙や文 法を反復的に確認 できるようにする。 ◎既習の語彙や文 法を反復的に確認 できるようにする。 ◎グループで活動 させることにより、 複数の意見や感想 を聞くことができ る場面を設ける。 ◎4技能間のつな がり意識して活 動できるよう指 導・支援する。 ◎友人からの質問 や意見、感想を、予 定を表す文の中で 生かせるよう指 導・支援する。
5 自己評価	5 本時の学習を振り返って、自己評価を行う。	

エ 授業改善のポイント

本時の授業は、中教審答申に示された活用型学習活動例の6分類における、「⑥互いの考えを伝え合い、自らの考え方や集団の考え方を発展させる」を目標としている。「自らの考え方や集団の考え方を発展させる」ことは、中学校英語の段階ではかなり高次の学習であると思われるが、それを体現化することを意図した活動が、Activity2の部分である。この活動の流れとしては、まず生徒はそれぞれの夏休みの予定について口頭で情報交換（聞く・話す）をする。その情報を元に英文を書いて（書く）表現する。次に、その英文をグループのメンバーに読んで（読む）もらい、内容に関するアドバイスを受ける。そして最終的に、そのアドバイスを生かして、より分かりやすい英文に書き直す（書く）。この活動において生徒は、前述の4技能及び既習の語彙・表現・文法を活用することになる。その結果として、自らの考えを整理することができ、表現内容の質を高めることができるものと考ええる。

オ 生徒の様子

対話活動のテーマが生徒たちにとって身近な話題であったため、どの生徒も意欲的に各活動に参加していた。Activity 1 の段階で、次の活動がスムーズに行えるよう、既習の語彙や表現を全体で確認したり、口頭練習を十分に行ったりしたため、大半の生徒が Activity 2 の活動に抵抗なく参加していた。また、インタビュー活動についても、活動直後に対話の内容を発表しなければならない課題があるため、真剣にメモを取る様子もうかがえた。以下に、生徒の記入したワークシートの例をあげる。

(2) Report your dialog.


(3) Write sentences. (自分のことについて書いた文にアンダーラインを引こう。)

My summer	I am	going to	play	badminton
I am	going to	have	a	big tournament
Mr. Okamoto	will	play	baseball	
He	will	go	to	Tokyo

(4) グループのメンバーの書いた文をペアで読み、質問・もっと知りたい点・感想などを書こう。

Where will you play badminton?

Are you a good player?



(5) アドバイスをもとに、もう1度英文を書いてみよう！

I	this	summer	I	am	going	to	play	badminton
I	usually	play	badminton	in	the	gym		
I	am	going	to	have	a	big	tournament	
I	will	very	difficult					
We	can't	wait						
I	am	not	a	good	player			
I	practice	badminton	hard					
Mr	Okamoto	will	play	baseball				
He	will	go	to	Tokyo				

Self-evaluation

○自分の夏休みの予定を英語で伝えることができた。 A B C D

○相手の言ったことをちゃんと書くことができた。 A B C D

○メンバーの英文を読み、質問、感想を書くことができた。 A B C D

○アドバイスをもとに、よりわかりやすい英文を書くことができた。 A B C D

昨年度から、生徒の発信力を高める一つの手だてとして、生徒に日記を書かせる活動（以下：Journal Writing と称す）を行っている。生徒がある程度まとまった分量の英語を話したり書いたりする活動が、発信力を高めるために必要であると考えたからである。また、授業においても、実践例のように、自分の言いたいことを書いて整理し、友人からのアドバイスをもとに発表内容の質を高める授業を展開してきた。その結果、生徒たちが「書く」ことに慣れ、その内容も深みを増してきたことは、昨年度の研究の成果だと言えるだろう。

本年度は、それを writing から speaking へと発展させ、与えられた情報をもとに友人と問答したり、意見を交換したりしながら、お互いの考えを共有できるようにさせたいと考えている。

4 本年度の研究

本年度の研究では、生徒の意識調査などをもとに発信力を高めるための方策の見直しや、研究に基づいた授業実践を行ってきた。本研究における「発信力」を高めようとしたとき、言語の使用場面や働きに応じて自分の考えや気持ちを英語で発信出来るようにするためには、聞き手が自分の話を理解できたかどうかを確かめたり、受容的な態度で相手の話を理解しようとしたりするなど、常に聞き手を意識しながら会話を継続させることが大切である。そのような聞き手である他者を意識するという、いわゆる「対人意識」を高めるための手だてを講じていくことも必要だということが分かった。

また、発信するためには、自分の考えを整理するためにある程度まとまった分量の英文を書かせることが必要であり、コミュニケーション活動を行った後には、必ず対話の内容を英語でまとめさせている。また、昨年度に引き続き Journal Writing も取り入れている。

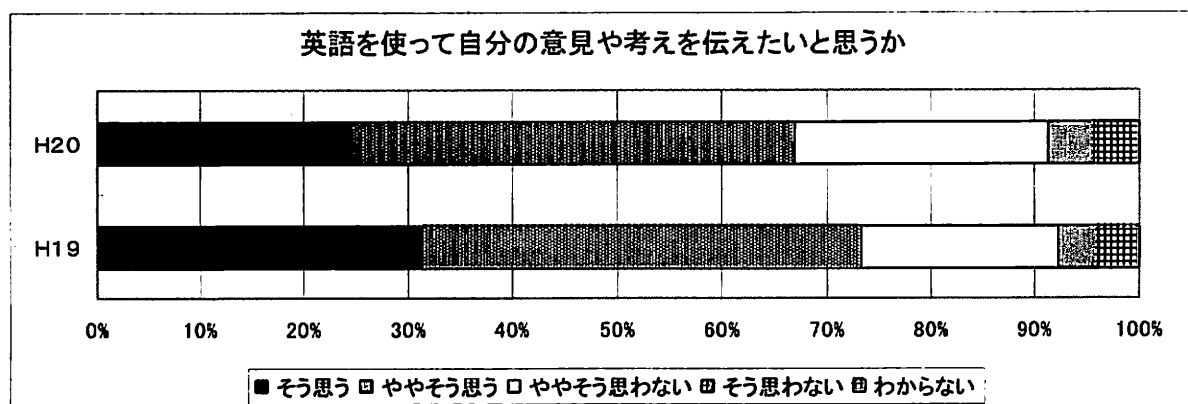
1 生徒への意識調査

本校生徒の英語の学習への意識及び授業中の活動への認識を把握するため、昨年度と同様の質問紙による調査を行った。対象生徒は平成20年度在校生455名であり、以下に

平成19年度在校生対象のものと合わせて、その集計結果及び考察を示す。

(1) アンケートへの主な回答状況

昨年度も本年度もおよそ90%以上の生徒が「英語の勉強は大切だ」という意識を持っている。ほとんどの生徒が、受験に関係なくとも、普段の生活や将来の生活を考えたときに英語は必要なものであると回答している。しかしながら、そうした意識が高いのに比べると、下のグラフが示すように、「英語を使って自分の意見や考えを伝える」ことには、やや消極的であると言えるだろう。



授業中に行う活動の中で、生徒がもっとも否定的な回答を寄せたのが「ペアやグループで話し合ったことを発表する」ことであった。前述の意識調査からもうかがえるが、「自分の考えや意見を発表する」ことには、やや消極的な生徒が多いことが分かる。

(2) 追跡調査

(1)の結果を受けて、「なぜ、発表することが好きではないのか。」という点について生徒に追跡調査を行った。生徒の意見の中で一番多かったのは「自信がない」「恥ずかしい」というものであった。「全体の前で話すと、文法や発音が合っているかどうか不安になる。」とか「単語が分からないから自分で言いたいことが言えない。」など、自分の英語力に「自信が持てない」生徒が多く、また、そのことから「人の前で発表することが恥ずかしい」という気持ちが強くなっているようだ。これらのことから、間違いや誤りを互いに受容し合えるような温かい教室の雰囲気の中で、生徒の基礎的・基本的な知識・技能の習得に、さらに指導の重点を置く必要があると感じられた。

また、一方では「友人の発表を聞いて、他の人の考えを知ること」は、「好きだ」「やや好きだ」とかなり肯定的な回答をする生徒が多く、友人の発表に面白みを感じ、興味をもって耳を傾ける本校生徒の意欲的な様子を表す嬉しい結果も得ることができた。

今後も、こうした生徒の学習意欲を生かし、生徒の興味・関心を引きつけるような題材や場面設定の工夫、及び、発表までの練習や準備の充実などに努めて、更なる発信力の向上を図りたいと考える。

2 「発信力のついた生徒の理想像」および「発信力育成のための学年目標」

発信力を3年間通して育成していくためには、各学年における目安となる生徒像を設定し、我々教師側がその到達目標を意識しながら授業を展開する必要があるのではないだろう

うか。そこで、生徒の実態及び「発信力」の定義から、本研究における「発信力のついた生徒」の理想像を次のように設定した。

- ア

自分の考えや意見を、相手に分かりやすく伝達できる。
- イ

既習事項の中から、その場に応じた適切な表現を選択出来る。
- ウ

まとまった分量の英文を、論理的に構成することができる。
- エ

自分と聞き手との関係や相手の理解度を意識することができる。

なお、「中学校指導要領（平成20年9月）外国語編」では、生徒の学習段階を考慮して各学年の指導にあたって配慮事項が記述されている。それを参考に、各学年の発信力育成のための学年目標を次のように設定した。

学年	第1学年	第2学年	第3学年
関心 意欲	コミュニケーションを通して得た知識や情報をもとにして、自らの意見や考えを相手に分かりやすく伝達しようとする。		
ア	簡単な表現を用いて、自分の気持ちや身の回りの出来事などを、伝達することができる。	つなぎ言葉や具体的な例を示しながら、自分に関わる事実関係や物事について判断した内容などを、伝達することができる。	場面に応じた適切な表現を用いて、様々な考えや意見に対しての自分の考えや意見などを、伝達することができる。
イ	既習の語彙や文法事項の中から、その場にふさわしいものを使って、自分の考えや気持ち、事実などを伝えることができる。		
ウ	文字や符号識別して、正しい英文を書くことができる。	語と語のつながりなどに注意して、自分の考えや気持ちやその理由などを読み手に伝わるように書くことができる。	文と文とのつながりなどに注意して、自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように書くことができる。
エ	自分と聞き手の関係や、相手の理解度を確認したりしながら自分の意見や考えを伝達することができる。		

3 発信力育成のための具体的な方策

上記の発信力を育成するために、授業中の活動において、次の三つのことに留意する必要があると考えた。

ア 4技能が相互に活用された活動

これまでの我々の指導においては、4技能間のつながりに対しての意識が薄く、生徒が「話すこと」を筆頭とした、それぞれの技能の習得自体を目的としてしまうことがあっ

た。発信力を育成するためには、学習者に、英語を学習することの目的は、自分の考えや気持ちを「発信」することにあることを意識させる必要がある。そのため、「聞くこと」・「読むこと」から受信した内容を、「話すこと」・「書くこと」を通じて、自分の考えとして他者に伝えることができるような活動を設定することが必要であると考えた

イ 複数の言語材料を用いる活動

生徒が授業中に行うコミュニケーション活動を、習熟度の面から分析すると、次のように分けることができる。

	学習過程（学習スキル）	言語材料との関わり
習 熟 度	体験・習得 ↓	導入・理解・練習 = Mechanical Drill
	利用 ↓	意思伝達を伴った使用 = Meaningful Drill
	自分なりの使用 (活用)	場面と内容に応じた、自分なりの使用 = Communicative Activity

このような流れの中では、習熟度が増すにしたがって、自己表現の要素が強くなり、生徒がその場に応じた言語材料を、自ら選択して表現する姿が期待される。そのため、自己表現の場面においては、現在学習している単元において新たに習得した言語材料のみを使用するのではなく、既習の言語材料を複合的に使用できるような活動を設定することが必要であると考えた。

ウ 語彙・文法の習得が反復的に図られる活動

生徒が英語を使って自分の意見や考えを伝えあうためには、その基盤となる語彙や文法の確実な習得が必要であることは自明である。新学習指導要領においては、2 内容、イ各学年の指導における配慮事項の項において、「前の学年における学習内容を繰り返して指導すること」が追記されている。今後の指導においては、この点に留意し、生徒が学年にとらわれず、既習事項を反復して使えるような活動を、授業の中に位置づけていきたい。

4 実践例

本年度の、いくつかの具体的な手だてに沿って行ってきた実践例を紹介する。

語彙・文法の習得が反復的に図られる活動の例（第2学年）

発信力は一朝一夕に身につくものではないことは明らかである。発信力の身についた生徒を育成するためには、その土台となる基礎的な力を身につけさせることが必要である。そして、基礎的な力を育成するためには、既習の語彙・言語材料・文法等のルールを反復的に使った活動を授業に位置づけていくことが大切である。

本校では、昨年度からまとまった分量の英語を書く力を育成するために、Journal writing を継続して行ってきた。その成果として英語を書く力の伸びが見られるようになった一方、Speech や Dialog 等、英語を話す力の面ではまだ課題が残っている状態である。

そこで、今年度の第2学年では、授業の冒頭の短時間を使い、「帯学習」として英語を話す力の育成につながる反復的なドリル活動を行うことにした。帯学習の中に Mechanical な活動から Meaningful な活動へと自由度を高めながら移行していく流れを作り、生徒を飽きさせることなく発信力育成のための基礎を身につけさせようと考えた。

(1) 語彙・文法の習得が反復的に図られる活動

周知のことではあるが、新指導要領第2項2内容（2）言語活動の取扱いイの（イ）第2学年における言語活動には次のような記述がある（下線は本校による）。

（イ）第2学年における言語活動

第1学年の学習を基礎として、言語の使用場面や言語の働きを更に広げた言語活動を行わせること。その際、第1学年における学習内容を繰り返して指導し定着を図るとともに、事実関係を伝えたり、物事について判断したりした内容などの中からコミュニケーションを図れるような話題を取り上げること。

先に設定をした発信力の定義のうち、「コミュニケーションを通して得た知識や情報をもとに」するためには、相手の発話から相手の気持ちや考え、意図等を正確に聞き取ることが必要となる。また、「自らの意見や考えを相手に分かりやすく伝達することができる」ためには、相手の存在を意識し、自分の意図が相手に伝わるように発話することが大切である。

しかし、発信力を身につけ、自由にコミュニケーションができる生徒を育成するには、自らの意見や考えを相手に分かりやすく伝達するための基礎的な力である語彙や文法などを活用できるレベルまで定着させる活動を反復的に行うことが不可欠となる。

また、アイコンタクトや受容的な態度、適切な言葉の選択等、コミュニケーションに欠かせない点について適宜ガイダンスを与えることも大切である。コミュニケーションは、必ず相手の存在があって成立することを常に意識をさせるためである。

(2)実践例

ア Mechanical な活動①

	English	子:
1.	Did you <u>enjoy</u> your spring vacation?	
2.	Yes, I <u>went</u> to Okinawa. I <u>swam</u> in the ocean. How about you?	
3.	I <u>went</u> to Kyoto to see my friends.	
4.	Did you have a good time?	
5.	Yes. I <u>talked</u> with them and <u>went</u> to many places.	
6.	Oh, that's nice. I <u>ate</u> delicious foods. I <u>danced</u> with many people.	
7.	Oh, you <u>had</u> a good time. I <u>bought</u> you a souvenir.	
8.	So <u>did</u> I. I <u>bought</u> a souvenir for you, too.	
9.	Really?	

上記のような発信力育成のための基礎として、まずはペアによる Mechanical な活動を行った。5ターン程度の既習の言語材料を含んだ定型の対話文を用意しペアで練習させた。

毎回の授業で2回ずつ4時間に渡って活動を行っているが、毎回活動の目標を設定し、何を、どのレベルまで目指せばよいかを生徒に明確に意識させて取り組ませている。

- ①速さを意識した音読
- ②感情を込めた音読
- ③相手を意識した音読
- ④暗唱し、演じる発話

目標が達成できたかをワークシートに毎回記録させ自己管理させることや、ペアで協力して活動に取り組ませ、相互評価をさせることで生徒は意欲を高め、自分の課題を明確にして次時の活動に取り組んでいる様子が見られるようになった。

また、達成できた喜びが次の活動につながる様子も見られた。活動の最後の段階では対話を暗唱できるようになる生徒も多く見られた。

イ Mechanical な活動②

4.	Where do you want to go?..	..
5.	Why do you want to go there?.. ※ 4の続き 4の理由を答えよう..	..
6.	What time do you usually get up?.. ※ usually だいてい..	..
7.	When is your birthday?..	..
8.	What is your horoscope?..	..
9.	Who teaches you (Japanese / math / social studies / science / English / music / ...)?..	..
10.	What is (the highest mountain /the longest river / the biggest 〇〇 / ...) in Japan?..	..
11.	Did you have your (breakfast / dinner)?..	..
12.	What did you eat for (breakfast / dinner)?..	..

アに続き、相手の考えや意見をより引き出すための有効な方策として、「質問」する力を伸ばす活動を行っている。ペアで互いに質問をし合い、その応答の内容を補助する1文を自分なりに付け加えることで対話が促進されたり、自分が意見や考えを伝達するためのソースとなったりするからである。

活動に慣れてきたら、生徒は質問を変更するなど自由に活用し、楽しみながら活動に取り組むことができた。

ウ つなぎ言葉の活用

自分の意見や考えを相手に分かりやすく伝えるためには、発話の内容を整理し、順序立てて話す必要がある。また、相手の発話の意図を確認したり、自分の発話内容が相手に伝わっているかどうかを確認したりすることも大切である。そのため、アで紹介した活動と平行して、つなぎ言葉の練習を適宜取り入れるようにした。

スモールトークをしよう！

Class No. Name

<会話をつづけるコツ①>.

「あ：いづら」と「リアクション」..

Really? I see. Great! Wow! Uh, huh. Oh, do you? Oh, are you?..
うん、うん

Oh, yeah? And then? I didn't know that! No kidding! などなど..
えー、そうなの？ それから？ それは知らなかったな！..

<会話をつづけるコツ②>.

自分の意見が相手に伝わっているかを確認しよう..

Do you understand? Do(Did) you get it? Are you following me? Am I clear?..

相手の言ったことの内容を確認しよう..

What do you mean by “相手の言ったこと”？ Pardon? ..

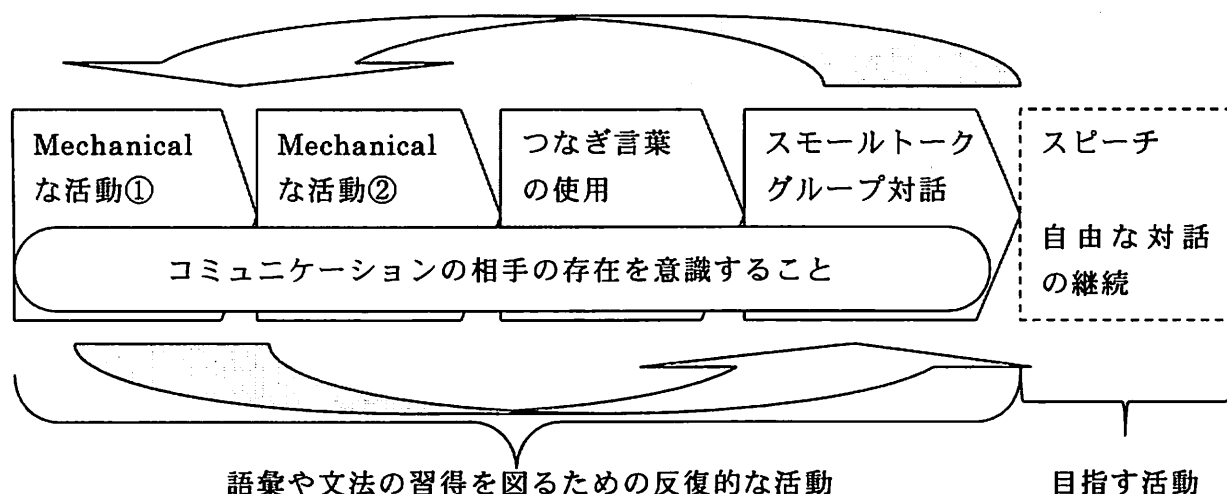
エ Meaningful な活動

アからウの活動後、ペアでのスモールトーク、グループでの即興での対話活動などを行った。スモールトークでは、教師から提示されるトピックについてペアで一定時間対話を継続する活動である。つなぎ言葉を使いながらなんとか対話を継続しようとする姿や、自分の意見や考えを、文を重ねながら伝えようとする姿が見られるようになった。

グループでの即興での対話活動とは、4人の小グループを作り、1人の話し手に対して3人が自分の知りたいことを質問して必要な情報を得ていくものである。他の生徒が質問した内容に感心してリアクションをしたり、話し手の答えに納得して頷きながらつなぎ言葉を使ったりするなど自然な状況の中で互いの意見や考えを交流させる姿が観察された。

(3)まとめ

(2)のアからエで紹介した流れを改めてイメージ化すると以下ようになる。反復的な活動が生徒の発信力の基礎となり、その先にあるスピーチや自由な対話活動に活用されることが期待される。



まとまった英語を使わせる活動の例 ～writing から speaking へ～ (第3学年)

昨年度より行ってきた Journal Writing では、まず個人レベルの活動として1日の流れを追って日記を書く活動と、授業においてペアやグループで話題を広げていく活動の2つを行ってきた。特に後者の4技能を相互に活用しながらの活動においては、生徒たちが自分の考えや気持ちが聞き手や読み手により分かりやすく伝わるように意識させながら行ってきた。本年度は、ペアやグループでより発展的な Journal writing を行うと共に、インタビュー等を通して得た情報について問答をしたり、意見を述べ合ったりする活動を行ってきた。今改訂の学習指導要領、「話すことの言語活動」では指導事項－(オ)与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること、が付け加えられたが、今年度の活動を継続して行っていくことにより、生徒たちがスピーチをする際により目的意識を持って、そして聞く側を意識しながら伝えられるようになるのではないかと考える。

(1)テーマ別 Journal Writing について

自分の気持ちを言葉にして表現したり、意見や考えをまとめたりすることを学ぶためには日記はとても効果的だと考える。昨年度までの Journal Writing では、生徒たちは身近に起こった出来事や、身の回りのことについての日記を個人レベルで表現してきた。1日の流れや、学校行事等について自分の考えを整理しながら、分かりやすく読み手に伝わるような工夫をそれぞれ考えて行ってきた。今年度はその読み手を、教師のみからクラスの仲間へと広げていき、より読み手を意識した内容へと幅を広げていけるよう工夫した。今年度期待できる効果として、以下の2つを挙げる。

ア テーマに沿った独特の表現を身に付けることができる。

1つのテーマに沿って書かせることにより、より明確な場面を意識しながら書かせることができる。事前に入れ替え表現や組み合わせ表現の例を示すようにし、日記を書いていく際のモデルとさせる。

イ 日記を共有し、より内容の幅を広げることにより、読み手を意識した文を書くことができる。

書かれた日記は、教師や友人が読み、感想や意見等のコメントを書いたり、内容について質問をしたりする。日記を読み、分からないことやもっと知りたいと思うことを書き手に明確にすることにより、自分が文を書く際にどのようなことを意識して書いていったらよいか参考にすることができる。

(2)実践例

テーマについての解説、入れ替え表現・組み合わせ表現等の例を全体で練習した後、Journalの例をまず教師が書き示すこととした。その際の注意事項としては、生徒が感想や質問がしやすいような文章を書くように心がけた。生徒は教師の日記を読み、感想や質問を書く。ワークシートを一時回収し、教師がそれぞれの質問の答える文を書いた。生徒のワークシートを再度配布し、今度は生徒が自分の日記を書く。その後、ワークシートはアトラダムに配りなおし、今度は生徒同士で共有させる。以下はその実際の例である。

3-11 No. 10 Name:

Ms. Hashino's Journal

Date: Wed., Jan 7

I went on a trip to Kagoshima. I was very excited. I learned a lot about Aka-hime and Bakumatsu. I felt like taking a walk to see Sakurajima.

Please give Ms. Hashino your comment!

When did you go there with? I went there with my husband.
Where did you go there? I went to Aka-himekan.
How long did you stay? I stayed there for two days.
I think your essay was very good and exciting!
It really was! Thank you!

Your Journal

Date: Mon., Apr 27


I went to Kyoto and Nara.
I was surprised at many deer in Nara park.
Some of my friends were afraid of many deer, but I was very glad to see deer. The deer were very cute!
So, I want to go Nara park again.

Comment from:

Question:

Answer:

I saw deer in Nara park for the first time.
I like deer very much so I like Eorbi's movie too!



(3)テーマ別 Journal Writing を行った生徒の感想（下線は本稿執筆者による）

- ・ 新しい単語やイディオムを覚える機会にもなり、テーマに応じて使う単語なども変えることができるようになった。
- ・ 自分の書いた文に何が足りないのかが分かった。
- ・ 友人のコメントが、プラス1の参考になった。
- ・ 質問されることにより、自分では考えられなかった文も書けるようになった。
- ・ テーマ別に、自分でも別の表現方法を調べることができた。
- ・ 友人との仲がより一層深まり、また日頃話さない人とも日記を通じて仲良くなることができた。
- ・ 相手が知りたいような情報を追加して、より深い文章が書けるようになった。
- ・ コメントを書くことにより、自然に質問ができるようになった。
- ・ 他の人の日記と関わることで、相手をよく知ることができた。
- ・ 自分で書いた文のみだと、全てが伝わるわけではないことが分かった。

昨年度に比べ、生徒同士で共有させる機会を増やすことにより、生徒たちは少しずつ読み手を意識した文を書くことを心がけるようになってきた。質問の内容も、Yes./No.で答えられるものから、理由を述べたり、感想や説明を加えたりしながら答えなければならないものへと変化が見られる生徒もいた。ただ、中には、「質問がワンパターンになってしまった。」や、「質問の仕方が文法的に正しいかどうか迷った。」などの反省点もあり、もう少し全体での共有や個人レベルの指導の機会を増やしていくことも必要であることが分かった。Journal Writingを通して行ってきたことを、これまでも授業中の対話活動の中でも少しずつ取り入れてきたが、今後は、より効果的な対話やスピーチ活動につながっていくように、グループ活動を通しての発表や全体での内容の共有の仕方等に工夫を凝らしていきたい。

5 研究の成果と課題

生徒たちは、「ペアやグループにおいて友人の話を聞くこと」を楽しく感じ、好きな活動として挙げている。これまでの普段の授業において、コミュニケーション活動を多く取り入れてきた成果と言えるのではないかと思う。そして、本研究においては、「4技能のバランスのとれた指導」「4技能を相互に生かした授業作り」を重視し、Journal Writingのような「書く」活動も定期的・継続的に取り入れてきた。その結果、「今まで習った表現を使い、いろいろな文が書けるようになった。」という感想や、さらに、その際、相手がどう感じるかを考え「自分の文をより内容を濃く書くことができるようになった。」と答える生徒もみられるようになった。自分の考えや気持ちを伝えようとしたときに、「対人意識」が高まってきたことは、本研究の成果と言えるだろう。

今後の課題としては、生徒がより興味を持って自分のことを話そう、友達の意見を聞こうと思えるような場面や題材設定の工夫をすることが挙げられる。生徒の意見の中には「自分の好きな話題を選べると良い」というものもあり、発表へのモチベーションをあげる一つの手だてとして、そうした機会を増やしていくことも有効であろう。

また、生徒が「発表する」ことに抵抗がある理由として、「自信がない」というのが大半だったことを考えれば、語彙や文法などの基礎的・基本的な知識・技能の定着は必須である。そして、生徒がそれらを活用し、自分が表現したいことを相手に的確に伝達するためには、その場にふさわしい表現方法を選択できる力も大切である。生徒にとって具体的で分かりやすい場面や状況を設定するとともに、既習の言語材料を活用するための手だてを提示するなど、日頃の授業実践の中で、生徒の「発信力」を高め、発表への自信につなげていきたい。

本研究の収束に向けての課題としては、「年間指導計画の作成に向けての準備」が挙げられる。新たに入学してきた1年生が、小学校でどのようなことを体得しているのかを的確に把握すること、及び、音声面を中心としてコミュニケーションに対する積極的な態度など、一定の素地が養われた生徒への入門期指導の在り方を再考していく必要がある。また、今回の学習指導要領改訂にあたって、どのような力を生徒に身につけさせたいのか、そのための下位技能にはどのようなものがあるのかを十分に分析した上で、それを教科書の内容と照らし合わせ、年間指導計画を作成していくことを考えていきたい。また、研究の最終年度としては、本研究の生徒の発信力がどのように高まったかについて調査し、その成果と課題をもとに、新研究の検討を進めていきたい。

【引用・参考文献】

- 文部省(1998)『中学校学習指導要領』解説 外国語編 東京書籍
- 文部科学省(2003)『英語が使える日本人』育成のための行動計画の策定について
- 中央教育審議会外国語専門部会(2007) 「外国語科の現状と課題、改善の方向性」
- 中央教育審議会外国語専門部会(2007) 「専門部会第17回における主な意見」
- 中央教育審議会(2008)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」
- 文部科学省(2008) 中学校学習指導要領
- 宇都宮大学教育学部附属中学校
- (1997) 研究開発実施報告書
- (2004) 第49回公開研究会発表要項
- (2007) 第52回公開研究会発表要項
- (2008) 第53回公開研究会発表要項
- 伊東治巳(1999) コミュニケーションのための4技能の指導 教育出版
- 太田 洋(2008) 英語を教える50のポイント 光村図書
- 市川 力(2005) 「教えない」英語教育 中央公論新社
- 桑原 隆(1992) ホール・ランゲージ 国土社
- 文部科学省(2008) 中学校学習指導要領解説 外国語編
- 平田和人編(2008) 中学校新学習指導要領の展開 外国語科英語編 明治図書